

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十五章

Accept the proposal

— 提案を受け入れる —

峯村 明

目次

Accept the proposal	
第三十四章に修正があります	2
お願い	3
登場人物	4
side Saadiq-1	6
side ken	14
side Saadiq-2	17
あとがき	20
奥付	21

Accept the proposal

第三十四章に修正があります

第三十四章 №333（の真ん中あたり）で修正がありますのでここに記載します。

～とつぜん出て来た名に、バイスロイは混乱し、絶句した。

<ここから>

「ボムソワール・メルノは——メッサナ郊外の沼地で猛獣に襲われ肉体を失った。
メルノはメッサナにおいて、筆舌にしがたい屈辱と絶望の経験をもっていた。その姿に、
ミツハは理不尽に我が子を取り上げられるという己の経験が重なるのを感じた。ふたり
の間に、いわば、共鳴が生じたのです。

<ここまで修正します>

ミツハは執拗な追手からメルノの魂を保護するために自身の中に取り込み、世界の果て
の島へ渡った」

↓

～とつぜん出て来た名に、バイスロイは混乱し、絶句した。

<ここから>

「ボムソワール・メルノは——メッサナ郊外の沼地で猛獣に襲われ肉体を失った。筆舌に
しがたい屈辱と絶望のなかで泥の沼をさ迷った果てのこと。
それは水棲動物に変えられ、水の中でもがくミツハの子の姿に重なるものでした。ふた
りの間に、いわば、共鳴が生じたのです。

<ここまで修正しました>

ミツハは執拗な追手からメルノの魂を保護するために自身の中に取り込み、世界の果て
の島へ渡った」

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年09月23日 記

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
レル・ヴァリス	H&L財団・医療チーム
ヘルガ	//
サーディク	ポルタアウレアの皇太子エドミール
X & Y & Z	エドミールのボディガード
クリスマン	ポルタアウレア公国の国務長官
ユミコ	竜門測めるのの孫

cast35.JPG

side Saadiq-1

•

その時、ボディガードYは室外で、Xは室内のマスターのもとで職務に当たっていた。それで、XはYから受けた伝言をマスターに伝えなければならなかった。

（泣かないでください 私があなたを守りますから）

（バイスロイさま——）

という感動的なやり取りの最中にやってきた伝言だった。耳にしたとたん、Xは青ざめた。あまりに、緊急を要するものだった。

（なにもこんな時に）そんな思いがXの胸中に浮かんた、無粋といえば無粋にすぎる伝言だったが、主人に伝え^{マスター}ないわけにはいかなかった。心を、鬼にしてでも。

（あの、マスター、エントランスに、面会人が）

マスターはいったん間をおいて、そろそろとXを振り返った。その顔は無表情だったが、実に多くの感情を放ってきた。今忙しいんだ！　なんで今？　誰だ！　後にしろ！！

（それが.....クリスマン長官でして）

「クリスマン.....クリスマン??」

（は）

「クリスマンが、どーして!？」

（それはつまり）

「昨夜、定時連絡を入れなかったのか!？」

(ぎょい)

「どーして!？」

(どーしてって、それどころじゃなかったじゃないですか!)

双方の声はクレッシェンドし、レル・ヴァリスとヘレガは同時に冷たく言い放った。
「お静かに!!!」

•

「そうだった、それどころじゃなかったんだった! ええい、くそっっっ!!!」

高貴なお方にあるまじき禁句を発しておいてから、
「ちょっと急用ができてしまいました、どこへも行かないでください、ユミコさん、まだ話があるんです!! すぐに戻りますから!!」

さんざん念を押して外へ飛び出していこうとすると、「バイスロイさま」とヘルガの冷たい声。何事かと振り向くとヘルガはベッドのイリチャの足元を指差している。ネコが二匹。いつ入室したやら。(←健についてきた)

シーツに爪を立てて抵抗する二匹を無理やり両脇に抱え、ボディーガードを従えてバイスロイはエントランスへと走る。

油断も隙もないネコ二匹は途中で放り出し、サーディクはXとYと共に廊下を走った。

エントランスでは小柄な老人が十人ほどの大男たちに囲まれて待ち構えていた。

「でんかー」

老人は唸った。「ご無事でなによりですがっ。いったいどういうことですかっ！」

「「こ、これには深いワケがっ！！」」

三人は同時に口を開いた。クリスマンはポルタアウレア公国の国務長官である。

昨日の非常警報以降、本部建物は外部と完全に遮断されていた。物理的にも、通信手段も。

通信機器が使えないため、ワークショップ中の学生の家族が連絡がとれないことを心配するかもしれない。そのため、その旨を、H&Lのスタッフが館内の別の場所から各家族に連絡した、という報告をサーディクは受けていた。

そこで安心してはいけなかったのだ！！

連絡がとれなくて心配し、現地へ押しかけてくるのは学生の親御さんだけではなかったのである。

国外にいる皇太子殿下の安否の確認がとれないとわかったクリスマン国務長官はその瞬間に席を立った。殿下の所在地ブリュッセル郊外ではこの日、空軍のヘリコプターが撃墜されたとか、空中で木端微塵に散ったとかいう真偽不明の情報も入ってきたばかりで、みなびりびりしていたのである。

自分の部下を引き連れて空港に到着した長官は、十人超の別動隊と鉢合わせした。彼らは殿下直属のボディガード集団だった。

連絡を取り合っていなかった双方は互いににらみあいながら、この瞬間に、「やはり殿下になにかあったのだ！」と悟ったわけだった。

まあ、こういうトラブルを防ぐために毎日の定時連絡を欠かせなかったのだが、もはやあとの祭りであった。

•

「だいたい、なんですかそのネコの毛だらけの服装はっ！！」

「こ、これにも深いワケが——」

「ネコの毛のワケなど聞きとうありませんわっ！！ 連絡がとれないとわかって飛んで来てみればこの体たらくっ！！ キミらもキミらだ、なにをしておったのっ！！」

X & Yにも火の粉が降りかかる。

「お取込み中のところ失礼いたします」と割り込んできたのはパウジーニである。「お部屋をご用意いたしました。ご案内します、ささ、みなさんも」

早朝のエントランスで真ん中で繰り広げられる騒ぎには、はや、人だかりができていたのだった。

ポルタアウレアご一行を別室へ誘導し、不機嫌に稲妻を迸らせている国務長官をなだめ、昨日館内で緊急の事態が発生し、対策として一般人の安全を考慮、隔離したために起こってしまったトラブルだと、総裁の有能な秘書は語って聞かせた。

「一般人とは、十代の少年少女とその保護者、そしてエドミール殿下とお付きの方々です。財団にとって、どちらさまもこのうえなく大事なお客様、過剰な対応だったかもしれませんが、みなさまの安全を第一に考えてのこと。そして——間をおかずに駆けつけてくださったみなさまのご心痛を想いますと、斬鬼の念に堪えません。しかしながら、エドミール殿下の安全確保が最優先であったこと、なにとぞご理解いただきたく——」

ベルギー空軍のヘリコプターの件はH & Lは全然関知していないのだからコメントのしようがない。

その件繫がりて空から落ちて来た異物でH & Lのバンケットホールが全壊したことはポルタアウレアには関係ないし。

パウジーニの説明の背後には実にさまざまなことが起こっていて、サーディクたち三人が三人、本国への定時連絡をすっかり失念していたとしても、無理からぬことだった。

それでもパウジーニの真摯にして神妙な態度と、此度の過剰な対応はおたくの皇太子殿下の身の安全をとにかく、最優先にした結果なのだという言い回しは、殺気立ったクリスマン長官の責任感とプライドとを慰撫したようだった。

エントランスでエドミールらがもめているのを見た健がパウジーニに耳打ちしたというのもある。恩を売っておいても損はないぞ、と。

クリスマン長官のことは昔から苦手だったんだよな—と、お小言を右から左へ聞き流しながらエドミール（＝サーディク）は考えている。思い起こせば……クリスマンの奥さんは、エドミールの叔母（＝健の母）ソフィアの養育係だったのだった。

クリスマン夫人は、それはそれは ソフィアを厳しく仕込んだ。ソフィア五歳の時からテーブルマナーから礼儀作法、裁縫、刺繍、乗馬——いやいや、夫人の厳しさをそういうのではなく、なんと、リベラルアーツを教えこんだことである。リベラルアーツとは数学、幾何学、天文学、文法、修辞学、弁証法、音楽、つまり“自由な知的探求”、“幅広い教養”である。

大公家の公女たる者、このような教養に幼少時より馴染んでおくべきである、というのがクリスマン夫人の考えだった。大公家のためにそれなりの家柄の男と結婚して子孫を残す、など考えが古い。大公家のために自立せよという方針だったのだ。

そしてソフィア本人がまた能力の高い人で、幾何学だろうが天文学だろうが、どうってことない、という人だった。指導する方もする方なら受ける方も受ける方である。ソフィアは息拔きに、絵画だの音楽だのを嗜んでいたのだった。

だから——あのソフィアがおとぎ話のような恋をしてくにを捨てた——エドミールにはどうしても受け入れられなかった。パリという華やかな土地で芸術のなかに身をおいたからだろうか。そんなふうに解釈するしかなかったのだ。それはクリスマン夫人も同じだったろう。ソフィアの音楽学校留学は息拔きにちょうどよろしい、くらいに考えて、率先して送り出したのに。ふたを開けてみたら外国人と駆け落ちとは——

失意のクリスマン夫人の姿は目も当てられなかった。目元涼しい美しい人だったのに、あっという間に老婆と化してしまった。彼女の夫、クリスマン長官の心中も察して余りあれば、大公家の人間に当たりがきついのもわかる。

思い起こせば苦々しいのだ。ソフィアを連れ去ったヒヤマコウイチとかいう男の存在が。

「……ター、スター！ マスター！」

「ん？」

「廊下に、学生たちが！」

Yに言われるまま、会議室の扉を開けてみると、そこには学生たち、ばかりでなく、か

れらの保護者までもがずらりと揃っていた。

「——どうしたんだ」

すると、いならんでいた学生たちから次々と声が上がった。「先生！」「先生！」「サーディク先生！」「先生！」

彼らの顔には、（おじいさんに苛められてる先生を助けに来ました！）と書かれていた。それはそれでカッコ悪い話ではある。

学生の一人が一步前に進み出た。

「ぼくたち、自主練したいんです！　でもスタジオも劇場も清掃とメンテナンスでしばらく使えないんですって。先生、どこか場所をお借りできませんか！」

ワークショップの最終日まで二日を残していたが、今日は終日、スタジオも劇場も使えないという通達が出ていた。昨日の（バンケットホール全壊というのは伏せられていた）警報機誤作動に関する全館のメンテナンスのため、と説明付きで。

学生たちにしてみれば学びたい機会が一日減ってしまうのだから自主練したいというのも当然だった。それとなく聞き耳を立てていたパウジーニに、この部屋はいつまで使えるのかと尋ねると、制限なし、ということだった、

「なるほど、わかった。ではこの会議室を使いなさい。彼ら（じいさんたち）？　すぐいなくなる」

・

クリスマンがそれを聞きとがめた。「なんとなれば、でんかは我らとともに帰国ということによろしいのですな」

「なんでそうなる。明後日まで仕事が残っている。きみらはもう用向きは済んだんだろ？　心置きなく帰ってくれたまえ」

「ちょ、ちょっとでんか！！」クリスマンはエドミールの腕を掴み、強引に部屋の隅まで引きずった。「今日はどうしても帰っていただかなくては！！　大公妃殿下が会いた

がっておられるのです！！」

「母上が！？ 加減がお悪いのか！？」

「お加減に波があるのはご存知でしょう？ 今まさに波のどん底、我らがやってきたのも虫の知らせやも知れず、このような時は一刻も早くご帰国を！！」

「.....」

「でんか！！」

「クリスマン、私にも仕事がある。H&L財団と契約し、学生たちを指導すると約束した。きみはそれを反故にせよと？」

「し、しかし、本業ではありますまい.....」

「そういう問題ではない。学生たちにも財団にも将来がかかっている。私はなんとしても成果を挙げてから締めくくりたい」

「ううう.....」

「あと二日。待ってくれ。母になにかあったとしても、きみの責任ではない。万が一の時は、私が父母に謝る」

「.....」

「ヒマだったらブリュッセル観光でもしてきたら。なんなら手配してもらおう」

「それほどヒマじゃありません」

クリスマンと話ながら、エドミールは己のボディーガード衆を目で追っている。ボディーガード予備軍である。

（何人来てるんだ.....十.....五人？ 十五人？ ふだん別の仕事してるやつらまでちゃっかりついて来やがって.....いや.....これは.....わざと、か）

（そうか、犯人はZだ！ やつにバンドの件をもらしたのが間違いだったのだ！！）

これはまずい。これでは——バンドどころかフルバンド（＝ビッグバンド）が組めてしまうではないか！！

こっちを見てにこにこ笑っているそのZを手招きする。彼は嬉しそうに飛んできた。

（お呼びをお待ちしておりました！）

（呼んだわけじゃない！）

（マスターと連絡が取れないなどという、こんなチャンスを見逃す手はありません！）

（なんのチャンスなんだ）

集団で移動する口実にできるということだ。

（何となれば、我々はプロですから）

（だからなんのプロだ！）

やはりZは仲間を引き連れて乗り込んでくるチャンスを虎視眈々と狙っていたのだ。得物も持参しているにちがいがなかった。

（やるぞ。せっかくだから）

（ぎょい！！）

クリスマンは部下を引き連れて帰っていった。

side ken

•

時間を少し遡る。

旧友ふたりと乾杯した後、健はサーディクのボディーガードYから声をかけられた。「お耳に入れておいた方がよからうと思いますので」、と。法務部の職員、ウィンディ・サトウの件だった。

そうだ、忘れるところだった、その女は真の誘拐犯じゃないか。

真を連れ出したのがウィンディだとわかった、あの時、健はすぐさま、ボディーガードたちにウィンディに関する注意喚起のメールを送ったのだった。

すると、時を置かずにウィンディはサーディクの仕事場に現れたのだという。そしてサーディクと同席していたユミコ氏に関心を示したため、危険の兆候を感じたサーディクがユミコ氏に財団の宿泊施設を勧めたのだった。

事件は『ホテル・グランプラス』へユミコ氏の荷物を引き揚げに行った際に起きた。ウィンディが先回りしていたのだ。

「ウィンディ・サトウが乗っていたエレベーターのケージに、ユミコ氏と自分が乗り込んでしまったんです。ウィンディはあきらかに、ユミコ氏にいやがらせをしようとした。そこへ——あの女が現れた」

「女？」

Yは説明した。三人しかいなかった下降中のエレベーターのケージに、突然女が現れたのだと。金色に輝く人形で、たしかに女だった。彼女はウィンディを背後から羽交い絞めにして口をふさぎ、Yに向かってこう言った。

『主に伝えよ。死神が仕えているのは、冥界王ではない』

スパークリングワインの余韻も眠気も吹っ飛んだ。真をさらって人質にし、イリチヤを要求した死神は、冥界王の命によるものだとはっきり言った。それが、違うというのか！？

「その女というのは何者なんだ！？」

健のつぶやきに、Yは答えを用意していた。「彼女は、シパド、と名乗りました」
そして、相手があ然とするのを見た。その名を聴いて、彼のマスターもこういう表情をした。

「え——ちょっと待ってくれ、なあ、Y、そもそも……そもそも西ノ宮さんはどうしてサーディクと——」

「ニシノミヤ？ ユミコ氏のことですね、彼女はマスターとマミヤ宮司の通訳を務めた方でして、その際に、ちょっとトラブルが……」

「すると、やはり日本でなにかあったんだな？ 西ノ宮さんと？ きみらが言いたがらなかったことだろ？」

「ええまあ、ちょっとトラブルがあってですね、それでマスターが当初の目的を果たせなかったのを、ユミコ氏は気に病んで、ここまで謝罪に見えたのです」

「ふうん……で……その、シパドという女は、ユミコ氏に対しては？」

「は？ いえ、なにも。シパドは抵抗するウィンディを連れていきました。その場で煙のように消えてしまったんです」

健は黙ったまま、Yの背後の壁を見ていた。消えてしまった？ 消えてしまった？ え？？

次々と女性が現れて——ペイリーも現れたんだが——、健の頭の中はすっかりこんがらがっていた。

（こんがらがっていたので、足元にいるネコにまで気がまわらなかった）

消えた者もある。ウィンディ。本人にはわるいがもしかして朗報なのだろうか。

彼女が死神と繋がっていたのは明白だが、その死神はいったい誰のために働いていたのか、わからなくなってしまった。

なんにしても、ウィンディ・サトウがH&Lで働くことは二度とないだろう。彼女は職場である財団法務部から、『嚴重に保管されていた』USBを持ち出そうとしていたと

いう。USB はYが取り返して法務部長に返還し、事なきを得たのだったが、未遂とはいえ、職員による重大な背反行為であることには変わりはない。

そしてこのあと、西ノ宮優美子氏と彼女の娘・奈々子の正体を知ることになるのである。

side Saadiq-2

•

芸術部門のワークショップのスケジュールが丸々一日減ってしまったのはいかんともしがたいことだった。それも、最終日を前にして。

降ってわいた災難にサーディク先生が呆然としていると、「わたしにお手伝いできることはありませんか」、救いの女神が現れた。

「ユミコさん！ その、ほんとですか？」

「ええ。使い走りでもなんでもいたしましょう、おっしゃってくださいませ」

「使い走りなんてとんでもない！」

日本で話した時、ユミコは歌うことに大きな抵抗をみせた。それは恐怖と屈辱と禁忌に結びついていただけだ。ネガティブな感情の発露は表現のひとつではある。だからこそ——そういう回路で思考し、表現する人間の内面をも理解することができるのではないかと——、ユミコの拒絶にショックを覚えながらも、H&Lの芸術部門責任者に就いたサーディク先生はそんなことを考えていたのだった。人生には不要な経験も、無駄な回り道も、失敗もありえない。起こるべくして起こるのだ。たとえば、生まれつき才能に恵まれ、失敗も挫折もなく、万能の芸術家として生きてきた彼にとって、歌うことにネガティブと、そして、ポジティブの巨大なふり幅を持つメルノの魂を擁するユミコという存在は——

彼は、それ以上、考えないようにしていた。今、ブリュッセルにいるユミコはあの時とは表情も雰囲気も別人のように穏やかである。とはいえ、彼女が日本で見せた拒絶の態度が彼の脳裏には深く刻み込まれていた。要するに、あの拒絶がすべてではないかと、なにかアクションを起こして、案の定、拒絶に遭うことが……怖かった。だが……

「わたしにできることはないか」

彼女の申し出をむげにはできない。実際、サーディク先生は困っていたのだから。そこで彼は、拒絶される恐怖の中へと自ら踏み込んだ。

「声楽部門を、まるごと受け持ってもらえませんか。私のかわりに、です」

「音楽部門を？ まるごと？ ですって？」ユミコは思わず眉をしかめた。そんな提案をされるとは、思っていなかったのだ。「いえ、わたしはただ——」謝罪の一環のつもりだった。

サーディクは、自分の口調が変わり、思ってもみなかったことを言いだすのを聞いた。「私は憶えてるよ。きみは私の提案をちゃんと受け取る。そして私の期待以上の成果を挙げる。きみは、そういう人だ」

「でも！ わたし——」

「心を鎮めて。心の声を聴いて。心はきみに、嘘をついたりしない」

「——」

「OK?」

•

芸術部門ワークショップ最終日。受講した学生たち全員を舞台上に上げて、サーディク先生は一名一名、細かく講評した。それぞれの特性について。評価できる点について。今後の課題について。

そもそも、サーディク本人が多分野に渡って活動し、さらに学生を指導するという試み自体、新たな取り組みだったから、ひじょうに意欲的だった。こういうエネルギーは、伝染する。ことに表現者を志すような感受性の強い人間にはなおさらである。

ゆえに、学生たちは自分自身に向けられた先生の言葉とまなざし、態度に大きな感銘を受けた。新たなスイッチが入ったようなものだった。

この最終日にやって来た人々もいる。学生たちをふだん指導している教師たちだ。彼らとの関係も視野に入れなければならないとサーディク先生は考えていたし、講評もそのことを含んでいた。つまり、ふだんの指導者から多くを学ぶよう示唆を与えたわけだ。

「きみたちは今回のワークで特別な教師に学んだわけではないのだ」、とサーディクは締めくくった。「芸術は特別なものではない。それはきみたちの内奥から自然にあふれ出るものだ。だからこそ、きみたちの表現に接した者は“心に響く”経験をする。日々、日常、今この時、この瞬間を、感じる。表現する。きみたちの家族、教師、学校、友人、すべて

が互いに響きあっている。今この時を、きみたちの心が感じるままに生きること、それこそが、私がきみたちに望むものだ。そして私自身も、私のスタッフも、きみたちから実に多くのものを得た。ありがとう。みなさん」

彼の声はよく通り、よく響く。講評はマイクなしで行われ、それは劇場の隅々にまで行きわたった。言葉には抑揚があり、手振り身振り、表情は言葉より雄弁だった。彼のパフォーマンスでもあったのだ。

一連のプログラムが終了したのは午後遅い時刻。
サーディク先生のバイオリン独奏で学生たちは舞台から退場する。ショパンの別れの曲。照明は徐々に落ちていく。これでおしまい。感傷的な雰囲気学生だけでなく、立ち会った大人たちもこみあげるものを感じ、胸があつくなるのだった。

からになった舞台の端にはバイオリンだけが残し、最後の一小節を弾き終えると——
リーーンンン……ゴォーンンン……
H&Lではこの鐘の音が終業の合図である。これから夜勤に入る者も残業に入る者もいるが、とにかく、学生も大人も、一日が終わった。劇場では私語もなく、みな余韻を味わっていた——

学生のひとりがふと気がつく。
舞台のカーテンが音もなく降りていく。演^だしものが終わったらカーテンはすべて上がるはずでは？

見れば舞台上にはさっきまでブラックスーツで神妙にバイオリンを奏でていたサーディク先生が、上着を脱いで白シャツを腕まくりしているではないか。

「さて！」頃合いを見計らってサーディク先生は声を張った。
「学生諸君の時間はこれにて終了！ ladies and gentlemen！ここからは、大人の時間だ！」

ぱちり、と指が鳴った。

場内はいっしゅん静まり返り、そして騒然となった。

ステージでは全員黒服のフルバンドがスタンバっていた。

あとがき

・冒頭でお知らせしましたが、前回・三十四章にて修正箇所があります。できればDLし直して差し替えてください。無料ですし。

・『国務長官』というのは、アメリカ合衆国にしかない閣僚なんだそうで、外務大臣と同じ意味です。どちらの名称がかっこいいか、という観点から国務長官になりました。

・今回の表紙の画像は、旧三十章のをそのまま使いました。ちょっと時間かけて作ったやつでして、気に入ってたんで。

2026年9月23日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十五章 Accept the proposal

2026 年 9 月 24 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「イラスト AC」 「image-generator」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

ℙ Akira Minemura 2025-2026

著 者 峯村 明
イラスト イラストAC
イラスト image-generator

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社